
マユコちゃん

nico

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マユコちゃん

【Nコード】

N6039E

【作者名】

nico

【あらすじ】

夕食時、父から重大な告白をされた僕は、ある決心をする！

九谷焼のド派手な大皿に、こんがりキツネ色した海老フライが10本乱雑に乗っている。僕らは五大家族。祖母、両親、姉、そして僕。1人2本の計算だ。

厄介なことに家族は皆海老フライが好物で、現在右端の一際大きなアイツを全員が虎視眈々と狙っている。海老フライが登場すると、家族の目は狩人へと早変わりする。

ごくり。

僕はあふれてくる生唾を首を動かし飲み込んだ。

実は昔から疑問に思っている事がある。それは我が家に海老フライが登場する際、決まって大きさにかなりバラつきがあるという事。万が一小さな海老フライが手元にきたら、不満で胸が押しつぶされそうになる。そもそも均等大きさなら、安心してゆっくりと味わえるだろうに。僕はその大小差の意味を、どうしても理解できずにいる。

紫檀のダイニングテーブルを、僕は囲んで座っている。母がご飯をよそい、皆に箸を配り終えたら、全員一致の「いただきます」のかけ声で、戦いの幕はようやく開ける。

「なあ正太。お前そろそろやばいんじゃないのか」

この大事な局面で、父が僕にぼそりと呟くように言う。気のせい か、わずかにその目に漂う哀愁。「何が？」と父を睨みつけながら問う。

母はエプロンを外しながら、「お父さん、正太も結構頑張っているよ。たしかに成績は良くないけれど、あまり厳しいこと言わないでやってね」とフォローしてくれる。しかし一言余計な気がしないでもない。

「いや、俺が言いたいのはそんなことじゃない」

父は僕を見据えたまま、母から茶碗と箸を受け取った。祖母と姉も黙って受け取っている。

「何だよ、何が言いたいのっていうんだよ」

僕の中でイライラが募ってくる。臨戦態勢をとっている時に話しかけるなんて、非常識にも程がある。

「お父さん、話はご飯の後にしたら？」

言いながら母は、自分と僕の席の前に、同じく茶碗と箸を置く。

「いただきます」

5人ハモリながら手を合わす。
皆一斉に海老フライを目指す。

「もう時間があまりないんだぞ？ 正太、分かっているのか」

後少して一際大きなアイツを手に入れそうな僕に、まだしつこく父は言う。おかげで箸は止まってしまい、その隙に祖母にアイツを奪われた。

「だから何なんだよ、うるさいな！」

たまらず僕は大声を張り上げる。もうムカついてしょうがない。

父は大きめの海老フライを2本皿に乗せながら、ソースをまんべんなくかけていく。慌てて僕も大皿から2本取ろうとするが、残された海老はもはや小ぶりのものばかり。家族を見渡すと、皆飄々と

した顔つきでそれぞれ大きな海老フライを口に含んでいる。

——やられた。僕はこいつらなんか大嫌いだ。

「ちゃんと手入れはしているのか」

父はバリバリと美味しそうな噛音を立てながら自分の頭を指し示す。髪の毛が乏しいその頭は、悲しく電気を反射する。……いや、違う。悲しいといえば僕の心だろう。

「さっきから何だよ、手入れって何。僕はちゃんとヘアワックスだつてつけてるしシャンプーとトリートメントだつてする。ハゲた父さんには無理だろうけどね!」

精一杯の嫌味を込めて言い放つ。

「お前は父さんの頭を影で馬鹿にしているのかもしれないが……これは遺伝だぞ」

「僕が父さんみたいにハゲるとでも言いたいのか?」

「ああそうだ。死んだ親父も禿げていたし、もちろん俺も禿げている。おまけに母さんの親父さんも見事なものだし、お前の叔父さん一同だつて全員ひどいもんじゃないか」

僕は母方の祖父、そして叔父一同を思い浮かべてみる。少し悲しく寂しい気持ちになってくる。

「だからって僕があそこまでハゲるとはかぎらないじゃないか。今なんて髪の毛が多くて困ってるくらいだし」

父は海老の尻尾を噛みしめながらうつむいた。顔には深い影が落ちる。

「俺も昔、そう思っていたよ。禿げないと固く信じていた……」

シーンというオノマトペが聞こえるんじゃないかと思うくらい、我が家の食卓はしばし静寂に包まれる。とても気まずい雰囲気だ。しかしその沈黙を破るかのように、祖母はつぶらな瞳をぱちぱちとさせ、お味噌汁をずいと飲む。

「亡くなったお爺さんはね、若い頃から禿げていたよ。そうだねえ、たしか27、8の頃から」

祖母の発言中、「僕に関係ない!」とさえぎって見たが、代わりに父が空気も読まずに割ってくる。

「父さんはな、24から怪しくなってきたぞ。いいか、遺伝をあのどるな。ところで正太、お前はいくつだ」

家族の視線は僕のほうへ。

無理矢理無視を決め込んでいたが、姉がわざわざ指折り数え、「アンタあと4年後じゃん」と余計な事を呟いた。

「うるさい!」

僕はわざと大げさに立ち上がる。と、同時に椅子は音を立てて後ろにひっくり返ってしまう。

「あら、ご飯は? 一口も食べてないじゃないの」

母は心配そうに僕を見るが、食欲なんてとうに失せた。第一そんなちゃんけな海老フライなんか、胸くそ悪くなるだけだ。

「正太」

呼ばれたけれど、振り向きもせず部屋へと急ぐ。

僕は力の限りドアを閉めた。

——あいつらなんか大嫌いだ。

パソコンは、音を立てて起動する。祖母が買ってくれたウィンドウズ。まずはミクシイのコミュニティを読み漁るつもりだ。きっと

ハゲ予防の体験談および成功談が書かれているはず。

ハゲは嫌だ。遺伝なんかに負けてたまるか。僕は強くそう思う。なにより僕の自慢は、髪を自在に遊ばせた無造作スタイル。これから長い人生、髪型にはこだわっていきたいと思っている。

ようやくそれらしきコミュニティを発見し、片っ端から読んでいく。皆、様々な試行錯誤をしているようだ。こんなに大勢悩んでいるのかと、思わず同志の数に圧倒される。

しかし僕の目は、ある不吉な書き込みで止まってしまうことになる。

【俺とうとう負けた。あんなに頑張ったのに……】

ほのかな不安に襲われ、僕は大の字になり深呼吸をする。同時にハゲた自分を想像するが、すぐさま否定。その姿、自分的にはありえない。

手後れになる前に何か良い方法はないのだろうか、ない知恵振り絞って考えてみる。

——つけて叩くというアレは？ 育毛材は？ 栄養材は？ 治療法は？

——治療法……？

——医学！

僕はすぐさま『翼』を思う。数少ない親友と呼べる友。医学部の彼はまさに救世主。きっと医学は日々進歩しているに違いない。

早速携帯を取り出して、着信履歴を表示した。

「正太、入っていいか？」

ドアの向こうに父の声。気分は一転、ブルーになる。

「何だよ、絶対に入ってくるな」

「分かった。けどな、聞いてくれ。父さんなりのアドバイスがある」
「いらない」

僕はひたすらイライラした。すでに禿げてる奴のアドバイスなんて、この先何の足しにもなりはしない。

「手短に言うぞ。俺の言いたい事はだな、その、なんだ、つまり禿げると一気にモテなくなると言う事だ。こう見えても父さんは昔モテていたんだぞ？　しかし髪の毛が薄くなった途端、周りの反応が冷たくなった。腫物に触るようにとでもいうべきか。とくに女の態度が酷い。言っておくが結構つらいぞ？　大切なのは外見じゃなく中身なのよと豪語する女でさえ、途端に手の平を返す始末。母さんとの結婚だって正直な所、お互いかなり妥協したと思う。だから前はおそらく完全に禿げ上がる前に、いい女をつかまえて、恋愛でそして結婚したほうがいいと思う。それが手後れになる前にできるせめてものアドバイスだ」

僕の頭に血が昇る。憤慨という言葉が相応しい。

「何だよペラペラと。アドバイスなんかいらないうって言ったじゃないか！」

「おおそうか……すまん」

足音は次第に遠ざかっていく。

僕はドアに向かって思い切りクッションを投げつけた。

それから携帯に視線を落とす。親友の『今井 翼』という文字は、

存在をアピールするかのよう煌々と輝いている。

急に不安になった僕は、すぐる思いで発信ボタンを静かに押した。持つべきものは友達だ。

『ただ今留守にしております。ピーという発信音の後にメッセージを……』

「だよね、どうせこんな時間につかまりっこないよね君は」

ブルーな気持ちさがさらに色濃くなっていく。

彼はいつも留守がちで、きっと今頃クラブでナンパでもしているだろう。

僕は発信音の合図を待つて、伝言を残す事にする。聞きたい事は2つある。まずは予防法、それから……女の子を紹介してほしい。

それにしても留守電に入れるとなると、異様に緊張してしまうのは何故だろう。

「あ、翼？ 僕だよ僕、浅田。元気？ あのさ、またあのお店行くよ。おいしいよね、あそこ。あれってさ、渋谷にも姉妹店があるって知ってた？ 今度行こう。……って言いたい事はそういうことじゃないんだ。あのさ、聞きたい事があるんだ。言っていい？ その、ハゲ……じゃなくて、聞きたい事っていうのはさ、遺伝についてなんだけどさ、っていうか予防法？ あ、それもそうだけど実は相談があつて。あのさ、その、女の子……」

無情にも僕が発言している間にタイムオーバーになってしまったらしく、機械音とともに録音は終わりを告げる。情け容赦なしとはこういう事を指すのだろう。

1人パニックになり足踏みをする。肝心な事は何も言えてない。だいたい翼の携帯の録音時間が短すぎるのがいけないのだ。

僕は渋々メールを打つ事にする。しかし『ハゲの予防』と打った

瞬間、むなしさが込み上げてきて文字を消した。代わりに『留守電の録音時間短いよ』と打ち、送信する。

「やばいのかな」

鏡に自分を写し、髪をかき上げてみる。それからおでこの生え際部分を凝視した。

「何ともないじゃないか」

ついでに歯を見せ、ニツと笑う。

…… 上手く笑えやしなかった。

「あれ、浅田じゃん。元気？」

頭の高い位置でお団子を結ってる女、西野繭子がニヤニヤしながら僕に近づいてくる。本人は蒼井優を意識しているらしいが、これっぽっちも似ていない。

「って、元気なさそうだね。すごいクマだよ、ジャンキーみたい。もしかして病んでんの？」

うるさいよと思いつながら、僕は無言で彼女を睨む。昨日は全然眠れなかったから当然だ。

「ちよつと何か言いなさいよ。つか、何その目つき。浅田の分際で感じ悪い」

駅から大学までの道、西野に会うなんて本当にツイてない。なぜか彼女はすごく苦手な存在で、原因は家の女どもの性格にどこことなく似ているからだろ。とにかく口から生まれたようなうるさい女。

運が悪い事におなじサークルに所属している。

「…………お早う、西野さん」

「こら、私の事は西野じゃなくて繭子と呼べって言ってるでしょ。何度言ったら分かるのよ。学習能力ないんじゃないの？ 前にも言っただと思うけど、私、名字で呼ばれるの嫌いな」

「そんな事言われても」

「いいから繭子と呼べったら」

西野はわざとらしく頬を膨らませているが、それが可愛い仕草だとも思っているのだろうか。どちらかと言えばブサイクだ。それに僕は『マユコ』だなんて、呼び捨てになんか出来ないし、したくなんかない。

「…………マユコ、ちゃん」

西野は目をしばたかせ、笑いながら軽く相槌をうつ。手は後ろで組み、ふらふらと上体を揺らしている。それが可愛い仕草だとも思っているのだろうか。

「ちゃん、か。まあ許してあげる。ところで浅田、今日バイトでしょう？ あとで行くわ。話したいことがあるの」

「ええっ!？」

僕の返答も聞かずに「またね」と言いながら、西野は手を振り駆けに行く。

僕は啞然としながら後ろ姿を見送った。「来るな」なんて怖くて言えそうもない。

鈴木さんはCanCamで、林さんはnon-no系。木村さんはZipperで、三田さんはおそらく装苑。

人を待つ間、中庭に座りながら女の子を観察する。かわいい女の子は大抵その系統の雑誌にあてはめることができてしまう。しかしそういう子はレベルが高すぎて、きっと僕なんか相手にしてもらえないだろう。

僕は昨夜から父の言葉に苦しめられている。いくら振払っても、頭に残って離れない。

——『完全に禿げ上がる前に、恋愛でもして結婚したほうがいい』

底しれぬ不安が僕をじわりと追い詰める。万が一遺伝の力に負けてしまったら。僕の髪の毛の寿命がひどく短いのだとしたら。

僕はえも言われぬ恐怖と戦いながら、道行く女の子の姿を目で追った。

「お前ふざけんなよ。いきなりこんな所に呼び出しやがって」

聞き馴れた少し低めの声。同じ大学同じバイトの藤崎さんだ。彼は1つ年上で、秘かに僕が憧れる人。格好良いし、背が高く涼し気で、口は悪いが裏表がない。

「申し訳ないっす」

僕はぺこりと頭を下げるが、彼は蔑むように僕を見る。あからさまに不機嫌だ。

「あのな、俺らこの後一緒にバイトだよな。つか、毎日バイトで会ってるし。なのに呼び出すってどういう事だよ。こっぴどいの、マジ

勘弁な」

藤崎さんは「つーことで」と言い残し、去ろうとする。

「待って下さい！　ちよつと聞きたい事があるんすよ」

「はあ？」

眉間にしわを寄せながら、藤崎さんは手に持つ缶コーヒーをぐくりと飲む。

「藤崎さん、こっそり彼女がいるんすね」

「ぶつ……何だよいきなり」

コーヒーが気管に入ったらしく、藤崎さんは咳き込んだ。それからささず僕を睨む。

「いるけど何」

「かわいいっすよね、彼女。よくバイト先に来てたっすよね。マジかわいいっす」

「だから何」

「僕、2人がつき合ってるなんて最近まで知らなかったんすよ。言ってくればいいのに。なんか水臭いっすよね」

彼は僕の頭を思い切りぶつ叩く。音は中庭に高らかに響く。

「バカかお前。なんで俺がいちいちお前にそんな事報告しなきゃなんねえの」

「いや、あの、違うんすよ。そんな事を言いたかったんじゃなくて、聞きたい事があるんすよ。……藤崎さんって、その、どうやって告白したんすか？　何て伝えたんすか？　それとも向こうから？　僕、彼女欲しいんすけど、告白の仕方分かんなくて……っていうかどうかどうすれば彼女ができるんすか？」

思わず藤崎さんのＴシャツを引っばった。数々の経験を持つ彼ならきつと教えてくれるだろう。

しかし早々に僕の手は振り払われ、

「ウゼえ！　のびるだろバカふざけんな。つか、それ人に聞く事じやねえし。自分で考えろ。それに伝えた言葉なんかお前に報告する

「気ねえし」

藤崎さんはコーヒを飲み干すと、離れたゴミ箱へ投げ捨てた。きれいな弧を描いて缶は跳ぶが、残念ながらフチに当たり、音を立てて跳ね返る。

「……ダサいっすね」

「うるせえ」

言いながら彼は空き缶の方向を見、顎でしゃくる。無言の『入れて来い』との命令だ。

僕は小走りで缶を拾うと、すかさずゴミ箱の中へと入れる。

「浅田、もう話は済んだだろ？」

「まだっすよ。ここからが本題っす」

彼は「はあ？ ふざけんな」と悪態をつきながら、露骨に嫌な顔をする。

「大丈夫っすよ、手短に話しますから。話と言っつのはっすね、昨日の夕食……」

僕は包み隠さず昨日の事を細かく説明する。食卓で、そして部屋での出来事を。

「……ということなんすよ。あの、なんか藤崎さんなりのアドバイスとかないっすかね？ 僕、切実で……」

彼は僕の頭を再び思い切りぶっ叩く。音に反応し、人はチラチラと振り返る。

「お前、話長えしウゼえ！ どこが手短だよバカ。つか、海老フライとか遺伝とか、俺にとっちゃどうでもいい話だろ。大体、実際に薄くなつてからハゲとか悩め。そんなくだらねえ事で、いちいち俺を呼び出すな」

「え、あの」

「もう行く。じゃあな」

彼は軽く手を上げ、足早に去っていく。

「ちよつ、藤崎さん」

彼は振り向きもしなかった。

「……へえ、私服の藤崎さんって結構カッコいいんだ。バイトの制服しか知らないから新鮮」

聞き覚えのある舌足らずな声に、僕は心底ギクリとする。お団子ヘアのうるさい女、“マユコちゃん”。

「なんでここに!？」

後ろで手を組みながら、流し目で西野は僕を見、含み笑いをする。

「何よ、いちやいけない？ たまたま通りがかっただけ。私だって散歩くらいするわ」

「っていうか、話聞いてた？」

西野は鼻をスンとすすると、満足げに「聞いてたんじゃない、聞こえたの」と答えた。

僕の目の前は真っ暗になる。

「ど、どこまで聞いてた？」

「ほんの少し」

「本当に？」

ふてぶてしく微笑む西野が不気味すぎて、僕の手は汗で濡れた。

「信用ないわね、じゃあ私が聞いてた内容を話してあげる。そうね、今アンタは必死に彼女を作ろうとしてて、大きな海老フライを老婆ちゃんにかすめ取られたのよね。あ、父親だっけ？ それから遺伝で将来ハゲそうだから、手後れになる前に結婚しようとしてる。で、予防法がないかと目論んでて、でもそれを知ってるであろう肝心の

友達はつかまらない。留守電の録音時間は短いし……って、このぐらいしか聞いてないわよ」

「全部じゃん！」

僕は絶望にうちひがれる。壁に耳あり障子に目ありは、こういうことを指すのだろう。

西野は口角をつり上げて「そう?」とわざとらしく言った。

「ねえ浅田、座りましょ。アンタの悩みを聞いてあげる」
「いらないよと叫びたい。だがその目に迫力があり、言葉は出ない。蛇に睨まれた蛙とは、こういう事を指すのだろう。」

「あそこに座りましょ」

西野は古いベンチを指差し、僕に歩行を促した。
やがて2人でベンチの前に辿り着くと、西野は急に僕の手を握りしめる。

「わっ！　ちょ、何？」

不覚にもドキドキしてしまうが、西野は僕を見、「せーので同時に座るわよ、いい？」と説明する。

意味が分からず戸惑ったが、「せーの」の声に従い2人で座った。
ベンチは不気味にキシキシと音をたてる。

「本題に入るわ。まずハゲだけどね、遺伝が影響するのは多分本当よ。私の父方は大丈夫だけど、母方のほうのお爺ちゃんやおじさん達は光ってるわ。ツルピカよ」

何が悲しくて西野とハゲの話をしなければならないのか。それより僕が気になるのは、西野とずっと手を繋いだままという事。これは振り解いてもいいのだろうか。タイミングが分からない。そもそも僕は多汗症で、人と手を繋ぐのは昔からすごく苦手だ。

それ以前に西野とこうして話す事は、僕にとって自殺行為であると言える。なぜなら西野は生粋のエンターテイナー。サークルの飲み会で、彼女はいつも盛り上げ役をかって出っていて、その饒舌ぶりを周囲にこれでもかとアピールする。……僕の話は彼女に面白可笑しく脚色されて、間違いなく笑いのネタにされてしまうだろう。そう考えると手はさらに汗ばんでくる。

「ちょっと浅田、聞いてんの？」

「き、聞いてるよ」

僕はあわてて西野を見るが、なんとなく目を合わせづらい。

「あのね、ハゲはいさぎ悪いことをするから格好悪く写ると思うの。例えばバーコード頭とか論外だと思わない？ ウケ狙いとしか思えないし、いさぎ悪いにも程がある。あと頭頂部に黒い粉を振りかけてる人。何のつもりなのかしらね、勘弁してほしいわ。あのね、禿げたらね、あえて髪を短く坊主にでもすればいいの。あれって全然格好悪くないし、そのいさぎ良さが逆に格好良いと思う。それに帽子でファッションを楽しめばいいし、何だって対処できるのよ」

僕は適当に頷くが、まだ西野の独壇場は続く。

「ハゲの予防はね、おじさんから聞いた事があるわ。病院に行くと薬を処方してもらえらしいの。だから浅田の友達に聞いてみるのは正解だと思う。あと、電気治療がいいみたい。よく分かんないけ

ど毛根が促進されるとか？ まあ私はハゲに詳しいって訳じゃないし、ハゲが嫌いって訳でもない。やっぱり男は外見よりも中身が大切って思うし、頭は別に重大な問題だとは思わないわ」

西野の話でお腹が一杯になり、僕の気分はどんどん悪くなっている。もう身も心もヘトヘトだ。

「あの、マユコちゃん。もういいから……」

「まだよ、まだ私の話は終わってない」

西野は強く言い放つ。

だいたい西野と手を繋いでる時点で、僕に自由はないのだろう。

「あと、彼女の作り方。告白の仕方だけどね、これはただ勇気と勢いが必要なだけ。相手の気持ちが一番難しいけどね。でも当たって砕けるしかないわ。マニュアルなんて存在しないの。自分の気持ちをもったいぶらずに相手に真剣に伝えることが大切。もったいぶれば片思いで恋は終わっちゃう。そういうのってつまらないと思わない？ 不器用でもいいと思うの。私は不器用な告白のほうが好きだし、不器用にしか伝えられない。でも浅田の場合は、まず好きな人を作ることから始めなきゃいけないと思うの。浅田はどうせ気になる人とか好きな人とかいないんでしょ？ 好きな人いる？ どのような、言ってみて」

「ええ！？」

僕は非常に困り、ぎこちなく左手で頬をかく。利き手は右手だけれど、西野の手に握られていて動かせない。西野はといえば、僕の目をガン見している。人と目を合わせるのが苦手な僕は、目のやり場に困ってしまう。きつと今、思いつき黒目は泳いでいるはず。

「す、好きな人は……いないよ」

西野は僕からようやく手を離すと、「浅田、手がベタベタ。これ

で拭きなさいよ」と着ているワンピースのポケットからハンカチをとりだした。

「え、いいよ」

僕は首を振って辞退する。「ふーん」という仕種をとると、西野は自分の鼻頭をハンカチで押さえ、くしゃりと丸めて握りしめた。

「ねえ浅田。バイトが終わったらミクシイ見てね。私、後でメッセーヂ送つとくから」

「えっ？　なんでわざわざミクシイに？　っていつかなんで僕のミクシイ知ってるの」

「別にいいでしょ。……じゃあ私、もう行くわ」

西野は突然すくりと立つ。

と、同時にベンチの重心は、完全に残された僕のほうへと傾き、僕は思いつきり地面に投げ出されてしまう。

何が起こったのか、さっぱりわからない。ただ言えるのは痛いと言う事。

西野は驚いた表情をした直後、白い歯を見せ、屈託なく笑った。

「アハハ！　やだ、同時に2人で立たなきゃいけなかったのに、忘れてた。ごめん」

笑いすぎでその目には涙がにじむ。それは太陽に煌めいて、僕は彼女が結構可愛く笑う事を知る。

「ほら立つて。大丈夫？」

西野が手を伸ばしてくる。なかなか白い、綺麗な手。

僕はそっと、彼女のか細い手に触れた。

「お前ふざけんなよ、ボーっとしやがって。ちゃんと働け、このウンコ野郎」

コンビニのバイトの制服、黄色いスモックに身を包みながら、藤崎さんは僕を睨む。

「ウンコ野郎じゃないっすよ」

「よく言っよ。さっきずっとトイレにこもってたじゃねーか。長えんだよ、この快便」

「いや、あれは」

言いかけて、僕は止める。実はトイレにこもっていたのは便意をもよおしたからじゃない。携帯でミクシイをこっそりとチェックしていたからだ。

メッセージは、すでに届いていた。

「っていうか、今日はあまりやる気がしないっすねえ。早く帰りたいっす」

「何があまりだよ、お前のやる気なさは露骨すぎだろ。せめて客のレジくらい打てよ、この役立たず」

「はい」

僕はパンの品出しをしながら、西野の、マユコちゃんのメッセージを思い出す。

【突然だけど告白のお手本見せようと思います。ほんと直接言いたかったけど、緊張しすぎて無理でした。浅田の携帯知らないから後で私に電話下さい。090・XXXXX・XXXXXです。ごめん

ね、すぐかけ直します】

手が震えてうまくパンが並べられない。商品はもうぐちゃぐちゃだ。

それからニヤニヤが止まらないのはなぜだろう。

「おい浅田あ、ちょっと来いよ。手伝えよ」
「はい」

その後僕は何度もトイレに行って、メッセージを繰り返し見た。もうすでに全文暗唱出来てしまう。電話番号だってスラスラ言うる。

その上頭から離れない、マユコちゃんのあの笑顔。

「藤崎さん。……あの、ちょっと電話かけてきていいですかね」

「ダメに決まってるだろ」

完

（後書き）

こんにちわ！ n i c oと申します。はじめまして。

この度は拙作をお読み下さり感謝します！ ^ ^

この作品は、第2回ベタ恋告白編の参加作品です。

「ベタ恋」で検索していただけますと、この物語が足元にもおよばないほどの、すばらしい恋物語を読む事が出来ます。ぜひに！！
^ ^

アドバイスとか感想とかいただけますとすげえうれしいです。
どうぞよろしくおねがいします！

作中の藤崎くんの恋物語は、拙作「一万円の女」で読む事ができます。

作中の浅田の親友、医学部の今井 翼くんの恋物語は、あいばさんの第二回ベタ恋作品で読む事ができます。とりあえず翼くんの留守電の時間が伸びる事をねがいつつ……ぜひに！ ^ ^

でわでわ、このしみつたれた後書きにまで目を通していただき、どうもありがとうございます！！

2008・7・7・ n i c o

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6039e/>

マユコちゃん

2010年10月22日00時44分発行